

西来寺蔵 義源撰『法華読音』 解題と翻刻

柴 佳世乃

解題

三重県津市の西来寺（天台真盛宗）に所蔵される『法華読音』を翻刻紹介し、併せて簡略な解説を施す。

本書は、鎌倉後期の天台学僧、成乗坊義源が、自らが伝授された『法華経』の字音について記したものである。奥書によれば、乾元二年（一三〇三）三月二十三日から二十五日にかけて、善峯寺において仏神聖人より伝授されたものという。書中、「乾元二一三ー廿三」（八オ）「同廿三日夜」（一一ウ）「已上廿四日」（二二オ）「已上廿四夜」（二二ウ）「已上廿五日」（三〇オ）などとあるから、実際に日にちを追って個々の字音を伝授されたのであろう。『法華経』八卷二十八品の、序品からはじまって勧発品まで順を追って、経の文字が掲出され、声点や入声表記、あるいは注意書が記されている。また、末尾には、「法花読誦相承」として梶井流・恵心流の血脈が記載され、両流に義源が連なることが示されている。これが日にちを明確に、実際に行われた相伝であるこ

と、檀那流（梶井流は檀那流に属する）・恵心流の天台教学二流において法華経読誦の口伝が存在し、このような形で一書にまとめられていること、そして教学における重要人物義源がそれに関わっていること、等の点において看過できない資料といえよう。本書については、『法華経』の字音研究の立場から、はやく兜木正亨氏が言及され、梗概も記されているが、全体の紹介は未だなされていない^①。

本書を所蔵される西来寺は、近世末の学僧宗淵^②（一七八六—一八五九）が住した寺である。宗淵は、山家本『法華経』を開版するにあたって、『法華経』およびその字音に関する書を博覧した。『法華経考異』下巻末尾に「妙経字音書目」としてそれらの書名が挙げられ、解説が施されているが、そのなかに、

法華読音 〈叡山ノ成乗坊義源法印ノ撰。其尾ニ載スニ法華読誦之相承ヲ一。先挙テ二梶井ノ流ヲ一云、慈覺大師、承雲和尚、尊意贈僧正、安愿内供、尋叡内供、明快大僧正、良真大僧正、最雲法親王、仁豪僧正、明雲大僧正、顕真権僧正、仁全法印、承弁法眼、源全法印、義源ト。次ニ挙テ二恵心流ヲ一云、恵心ノ先徳、覺超、勝範、長豪、忠尋、寛勝、仁真、行忍上人、阿観上人、義源ト。右ノ両流ハ一同、但有ニ口決一。更ニ問ヘ。乾元三年三月伝受ト云云。淵、写ニ得ス二本ヲ一。一本ハ者、葛河ノ明王堂ノ藏、一ハ者、東山ノ若王子ノ藏也。

（後略）

（〈〉は割注、句読点は私意。引用に際し、音訓符は省略した。）^③

とある。これが本書に他ならない。宗淵は、義源の音を批判的に取捨し^④、『法華経』研究を成しているが、その著作の中に「源音」（『義源「法華読音」の音）への言及は多い。宗淵が、参照すべきものとして本書を取り上げていたことがうかがわれよう。

ところで、本書に関連するものに、随心院蔵『妙法華経音義』、ならびに京都大学文学部蔵『法華廿八品字読クセ』がある（以下、適宜「随心院本」「京大本」と略称）。

随心院本については、京大本との対照をも含めて、山本秀人氏に詳細な解説があるので、それを参照しつつ、『法華読音』との関係述べたい。随心院蔵『妙法華経音義』の構成は、左の通りである（山本氏による）。

- ① 法華経読誦の作法（序文に相当）
 - ② 音義本体
 - ③ 「法華経読音句」
 - ④ 「又様」
 - ⑤ 「法華読誦相承次第」
 - ⑥ 「旦」「大」等人名略称の説明
 - ⑦ 「半音」「中音」等の解説
- 同様に、京大蔵『読クセ』の構成は、
- ② 「読クセ」本体（……随心院本の音義本体に相当）
 - ③ 「法華経読音句」
 - ④ 「又様」
 - ⑥ 「旦」「大」等人名略称の説明
 - ⑦ 「面授口決」

⑤ 「法華読誦相承次第」

△「法華経陀羅尼」(……随心院本には無い)

である(丸数字は、随心院本に対応。いずれも山本氏解説より適宜引用)。随心院本によって示せば、内容は大きく①②と、③④⑦とに分けられる。『法華読音』を右に対比してみると、その内容は、①②そのものに相当するのである(しかしながら、『法華読音』に見られる「已上廿四日」等の伝授の日付の記載は無い)。ここで重要なのは、右書の相承次第と相伝者である。随心院本末尾には、「応安三年(一二七〇)庚戌七月六日 法印権大僧都叡記」とあり、「叡」とは血脈より「叡憲」なる人物であることがわかる。梶井流血脈には、義源から叡憲に至る線が示されており、かつ、文中「私云叡一、対成師一部首尾奉受分及七八个度」の謂いがあるので(「成師」とは、成乗坊義源のこと)、義源から叡憲に相伝されたものと推定される。

結論から言えば、『法華読音』は、義源が、乾元二年に相伝された『法華経』字音の内容を著したものであり、随心院蔵『妙法華経音義』および京大蔵『読クセ』は、『法華読音』を含めて義源から弟子叡憲に伝授された口伝を、叡憲が記したものであると考えられる。『読音』に見られる伝授の日付が後二者に無いのも、相伝にあたって省略されたのであろう。随心院本・京大本は、相互に声点表記が相違している箇所が若干見られるが、『法華読音』との対比においても同様に、相違箇所が存する。書写段階における差声の誤りなども考慮すべきであろうが、検討の余地を残す。ちなみに、『法華読音』冒頭の、読誦の際に唱える頌は、随心院本にのみ見られる(前掲構成①)。おそらく『法華読音』撰述時より付されていたものであろう。なお、随心院本および京大本の③以下には、読経道(芸道としての読経)にまつわる伝承などが見られ、これが義源から叡憲に伝えられたものであ

るとすれば、教学の人脈の中にこうした読経伝承が広まっていたことをうかがわせて興味深いが、ここでは立ち入らないでおく。

さて、義源について、血脈を中心にいささか触れておく。義源は、天台教学においては梶井流に属し、さまざまな口伝類を記録して学問の中心を担った「記家」のひとりである。梶井流の血脈『師資相承血脈譜次第』⁷⁾に、義源の名が見える。

付嘱梨本門跡 梶井正流

道達和尚、伝教大師、慈覚大師、承雲和尚、尊意贈僧正、安愿内供、尋叡内供、明快大僧正、良真大僧正、仁豪僧正、最雲親王、明雲大僧正、顕真権僧正、〈此時当流二分。一分仁快大僧都、今大祖師也。分布延暦寺執当仁全法師〉、仁快大僧都、承快法印、雲快僧正、顕雲僧正、顕意僧都、雲雅僧正〈已上大塔門流〉、仁全法印〈梶井流祖師〉、承弁法眼〈同執当、源全法印〈同〉、弁全法眼、義源〈已上梶井流〉、光宗、慈顕

(傍線引用者)

慈覚より顕真、仁全より源全、そして義源へという、『法華読音』の梶井流血脈は、若干の順序の逆や省略はあるが、右にはほぼ等しい。義源は、山王神道の書『山家要略記』の成立に深く関与したことで知られ、『溪嵐拾葉集』の編者光宗の師であった。また檀那流のみならず、恵心流、台密穴太流等々諸流に通じ、中世の天台教学の興隆におおきく寄与した人物である。義源の足跡は野本覚成氏によってまとめられているが、それに参照すれば、『法華読音』を伝授され著したのは、記家としての活動が本格化する前のこととなる。円頓戒の再興を成した興円と関わるのも、この後である。義源をめぐる人脈については後考に委ねたいが、義源の広汎な学のかな

に、『法華経』の字音学が確かに存在していたことは留意すべきであろう。

本書『法華読音』は、主として字音研究の立場から取り上げられることはあったが、教学や中世文化の側からはほとんど言及されてこなかった。これが義源の撰述であり、恵檀の教学においても字音の口伝伝授がなされていたことが浮かび上がって大変興味深い。南北朝期に至ると、記家にも通ずる心空が、字音に関する書物を次々と著していくことも思い併される。本書は、教学と読経道の連関を考える際に、様々な示唆を与えてくれるはずである。

注

- (1) 兜木正亨『法華版経の研究』（大東出版社、一九八二年）。数箇所にわたって言及があるが、特に「法華経開版史上における宗淵上人の業績」に内容の梗概について記載がある。
- (2) 宗淵については、『天台学僧宗淵の研究』（真阿宗淵上人鑽仰会編、一九五八年）に詳しい。
- (3) 国会図書館蔵本による。
- (4) 注1前掲書に論じられる。
- (5) 『随心院聖教類の研究』（汲古書院、一九九五年）所収「随心院経蔵重要典籍 影印・翻刻・解説」のうち、「妙法華経音義 一帖」（山本秀人解説）。
- (6) 『読経口伝明鏡集』との関連で、前掲山本秀人氏が言及。また京大『読クセ』に触れて清水眞澄「能説と能説—音芸「読経」の領域と展開—」（『梁塵』一四号、一九九七年十二月）にも言及がある。
- (7) 俗慈弘『日本仏教の開展とその基調（下）』（『中世比叡山における記家と—実神道の発展—（三省堂出版、一九五三年）所収。

- (8) 野本覚成「成乗坊義源の行跡―鎌倉末比叡山の学匠―」『天台学报』二七号、一九八五年二月。
(9) 読経道については、拙著『読経道の研究』（風間書房、二〇〇四年三月）を参照されたい。

謝辞 西来寺には、一九九七年春の最初の閲覧より一貫して、便宜をはかっていた。貴重な資料の閲覧と紹介をお許し下さった西来寺に、あつく御礼申し上げます。

書誌

仮綴装一冊。法量、縦十四・二糎、横十五・一糎。料紙楮紙。墨付三十二丁。

外題「法華讀音」（左肩打付書）。内表紙外題「乾元中義源撰／法華讀音」（中央打付書）。

表紙右肩に「舌」の文字有り（墨）。またその下に「往」の文字有り（朱）。「西来寺蔵」の朱角印有り（表紙中央）。近世後期書写。

*なお、『国書総目録』によれば、「法華読音 梶井流恵心流」なる明徳院無動寺蔵本が知られるが、叡山文庫には見出せず、未見。叡憲の著というから、おそらく義源から叡憲に相伝されたもので、解題で述べた随心院本・京大本と同系統のものと推測される。

翻刻は、次のような方針で行った。

一、漢字は通行の字体を用い、割り注はへで括った。

一、行取りは底本に従った。

一、半丁毎に『を付し、行頭に丁数を示した。

一、声点は、底本通りの場所に付した。

一、末尾の相承血脈に、一部朱書きになっている部分があり、〔〕で括って示した（原本の破損箇所を、他本によって忠実に補ったものと推定される）。

翻 刻

乾元中義源撰

法華読音

『（内表紙）

無上甚深微妙典

百千万劫難遭遇

我今見聞得受持

願解如来真実義

已上唐本端有此頌

1オ 奉読之時先可唱之

1ウ（半丁白紙）

妙法蓮花經序品第一

王○舍○城○ 耆闍○山○中○

逮○得○已○利○ 阿○若○憍○陳○如○

伽○耶○ 大○目○犍○連○ 畢○陵○

薄○狗○ 衆○所○知○識○ 眷○属○俱○

2才菩薩 殖衆德 仏恵〈非エ非テ 中音ナルヘシ〉』

能度へノウ ヨク タイハ義叶ヘリ タイタヘタリ 然而常ニハノウ

勇施 釈提桓因 乾闥〈山門〉

乾一〈法相 三井同〉 樂〈カク山門 ケウ法相〉

樂音乾 美音乾

婆知阿修門 婆へニコルヘキ歟 然而スミタルハ尋常也

2ウ 佉羅騫駄 圜遶 大乘

是○時○天○雨○ 尔○時○仏○放○

眉○間○百○毫○ 万○八○千○世○界○

行○菩○薩○道○ 般○涅○槃○者○

今○者○ 当○以○問○誰○ 誰○能○答○者○

必応〈中音 ヲウニモトウニモ非ル音也〉我今当問

3才照于〈ウノ字ツキアケテ可読之〉欲重宜此
『

悦可衆心〈去声ニ可読歟然而平声ニヨミタルキ、ヤスキ歟〉

因縁〈ネントサハミトヨムヘシ 音通ノ字也〉皆如金色

演説經典 出柔栗音

梵音深妙 若人遭苦

及千億事 金剛諸珎

3ウ諸仏所難 巨妾

樂誦經典 深山

深修禪定 安禪〈去ハ安義 平ハ息義〉

宴默 濟地獄苦〈獄苦ノ二字 ヒキノケテヨムヘシ〉

増上慢人 捶打〈去声コトくシ 平声宜シ〉

及癡眷属 施仏及僧

4才教詔〈下モ去声ニ読ヘケレトモ平声ニヨムナリ〉
『

香花 殊特 一光

放一淨光 欣仰

及見諸仏 当知 正遍知

深遠（ノウハ音通スル也） 純一

説応（中音） 有八王子

4ウ七名（下ニテハ七チト上ニテハ七ツト読也）

如来於今日中夜 阿伽度

利養（仮名ヲハイヤウト付ヘキナリ 然而略イヲ一ヤウト付ルナリ）

八王子 諸天 龍鬼神

及見諸天人 如金山

如恒沙 適從（チヤクハ僻読也 然而サヨミツケタリ シヤクトヨムヘキ也 チヤクハタマシヤクハハ

5オシメ又マサニト云義也）

何因縁 光歛喜

悉皆能 於中夜

一遇 一何速 安慰

勿憂 加精進 法花（クエト人ノ

耳ニ聞ユルヤウニヨムヘシ） 諸仏已 廢忘

5ウ一心待 方便品

仏曾親近 五從成仏

言教 深遠 言之

仏所成就 及世人 不堪

善說法 如稻麻

6才告諸耳 仏以

引之令得出 有所言說

未曾從仏 久乃

亦無能問 諸天龍

所行道 瞻仰待

諸増上慢者 唯垂 枝葉

6ウ佳矣 鉢華 時一

唯以一大事 一仏乗 出於

有懷増上慢 我慢 仏威

以諸縁 一偈一乗 不可

亦無貪 立誓願 今者

三惡道 虚安法 諸法相

7才善契心 搏瓦 綵画

角角唄 〇箆篋 仏徳〇

塔廟中 南無〇〇〇 其実為一乗

說一乗 如第一 及諸根利鈍

安穩 〇入生死 〇如犂牛

亦經行 七日中 我聞聖師子

7 ウ不可以言宣 差別名

從久遠劫來 為說仏恵故

於諸菩薩中 說無分別法

悉亦当作仏 懸遠

出于世 乃一出

發一言 心生大歡喜

8 才卷第一 乾元二一三一廿三一

8 ウ (半丁白紙)

第二 譬喩品

感傷 〇失於 〇必以大乗

而今從仏 聞所未聞

從[○]仏[○]口[○]生[○] 仏^{中吉}音[○] 於[○]山[○]谷[○]

一^ッ法^ッ中^ッ 十^ッ八^ッ不^ッ共^ッ 我^ッ獨^ッ經^ッ

9才巧言說[○] 深[○]遠[○] 永^{キヤウ}已[○]

為[○]天[○]人[○] 於[○]天[○]人[○] 所[○]行[○]道[○]

^{ツラナル義也}

七[○]宝[○]行[○]樹[○] 若[○]欲[○]行[○]時[○]

善[○]知[○] 無[○]瑕[○]穢[○] 悉[○]具[○]足[○]

人[○]民[○]衆[○] 雨[○]衆[○]天[○]花[○] 若^ッ過^ッ世[○]

及^ッ見^ッ仏[○] 亦[○]各[○]自[○]以[○]離[○]我[○]見[○]

9ウ若^ッ国^ッ邑[○] 僮[○]僕[○] 一[○]門[○]

多[○]諸[○]人[○]衆[○] 棟[○] 焚[○]燒[○]

從[○]四[○]面[○]起[○] 我[○]身[○]手[○]有[○]力[○] 手[○]有[○]ヒ[○]キ[○]ノ[○]ケ[○]テ[○]ヨ[○]ム[○]ヘ[○]シ[○]

几[○]案[○] 從[○]舍[○] 狹^ッ小[○] 恋[○]着[○]

視[○]父[○]而^シ已^シ へ[○]ス[○]ミ[○]ニ[○]コ[○]ル[○] 情[○]必[○] 難[○]得[○]

門[○]外[○] 駕[○]以[○] 我[○]有[○] へ[○]ヒ[○]キ[○]ノ[○]ケ[○]テ[○]ヨ[○]メ[○]

10才不[○]也[○]世[○]尊[○] 況[○]復[○]

而[○]拔[○]濟[○]之[○] 懈[○]倦[○]

為生老 保任 勤修精進

誘進 獨得 其它

椽栳差脱 烏鵲 虫輩

其舍恐怖 舍恐ヒキノケテヨムヘシ

10 既飽 蹲踞 一尺 へチヤク シヤク

惡獸 崩倒 藏竄

周章 妖洒 門外

貧樂 張施 細氈

雖復教詔 今所応作

真実無異 名第三諦

11 才聞者 更正 梨黠

水草 啖食 抄劫

如恒河沙 園觀 山澤

求經 同廿三日夜

信解品

居僧 涅槃證 逃逝

11 ウ他国 本国 皆盆

買客 還到 余年

庫盆 子息 一旦

憂慮 展転 承足

覆以 散衆 出内

特尊 急追 愕

12 才大喚 見捉 執之

以冷水 灑面 審知 除糞

具陳 糞土 塵分土

盆器 麵心相

当体 宣言 怪惜

今法王 大宝 音教 頓止

12 ウ愛念 死時 瘡券

覆目 借問 皆便令知

門外 周行 恣其

報○仏○之○恩○子○等○法○中○

報○者○兩○肩○
尽○心○
ツク
ス

又○知○成○熟○

13才 卷第二

13ウ (半丁白紙)

第三 藥草喻品第五

所○行○世○界○遍○覆○
フ
タ
ウ

善○處○所○能○
フ
タ
ウ

枝○葉○普○覆○
出○于○
中
音

枯○槁○及○者○
及○得○

14才 尊處 一滯 所行

授記品

而○於○來○世○足○尊○散○衆○

称○計○敢○食○沙○磔○
リ
ヤ
ク

樓○閣○当○供○最○後○身○

見○者○称○数○於○當○來○世○

14 ウ勝者 長表 意樂国

如恒河沙 当説

化城喩品

不也 垂 常撃

身体 減損 咸稽

此是何因縁 万億国土

15 才及見 千市 散花

納処 迦陵 減少

雨充滿 遠音 轉減

及智恵 及樂想 邪見法

劫習法 三轉 行法輪

靜室 入室 昇

15 ウ安祥 所行 及声

險難 衆人 懈怠

疲倦 語衆人言

知諸生死 息故

諸天神龍 及世人

覺悟カクサトル 及〇四維〇 甚難〇值〇

16 才ケウ甘露サム 応〇当知〇 如恒沙〇

助法ツ化〇 迦〇絕〇 獸〇

水草〇 重門〇 高樓閣ロウ

入ッ此城〇 懈〇廢〇 尔〇乃〇

16
ウ

第四 五百品

奇特〇 歎其〇 於賢劫中ッ

台觀〇 宮殿〇 交セウ接〇

兩得〇 欲懈ッ怠〇 不亦快ッ

樓閣〇 為宣說〇 諸神通〇

17 才他国〇 乏短〇 我引久〇

諸餽饈〇 甚艱難〇 常愍〇

及ッ轉次〇

人記品

不亦快ッ 既滿〇 名常立ッ

新發意中 於空王〇 面於仏〇

17 ウ太子時 為法子

是二千声聞 後当成正覺

諸神通

法師品

如來使 天花香 及天寶

衆甘美 及種々 說經典

18 才猶多怨 況滅 衣覆之

渴乏 施切 余国

異国 難得 於高原

深經 是諸經 加刀杖

宝塔品

而莊校之 龕室

18 ウ今応当集 衆菩薩言

諸宝 滿掬 見所

開 及見 及第

如清涼 足指 遠擲他国

19 才為一人說

第五 提婆品

及○天○人 不○惜○軀 於○法○故

宣○令 大○法○故 時○王○聞

八○十○種○好 磨○金○色

時○天○王 信○敬 諸○群○生

19 ウ 年○始 我○雅 時○龍○王

當○時 六○變

勸○持○品

為○慮 上○慢 雖○難

広○宣 利○養 但○惜

安○樂○行○品

20 才○難○有 及○畜 況

鯁○捕 屠○兒○魁○膾

嬾○惰 亦○尔 安○樂○供

悲○慢 常○柔○和○能○忍

故○行○道 髡○中○明 賞○賜

見身処中 七日

20ウ湧出品

単已足尊巨身

其因縁之因縁皆從中

於三千心生太子時

不遠生育如蓮花

面皴

21才 已上廿四日

第六 寿量品

非心力 限数 年紀

良医 子息 遠至

宛轉 經方 痔瘻

所中 求索救療

21ウ死時 差 他国

背喪 不也 心恋慕

諸堂閣 我智力如是

為凡夫

分別功德品

立精舍 若經行 万億劫

22才中之王 解其言趣 及造

声聞衆僧 若經行處

而莊嚴 甚高広 常照明

衆住處 謙下 諸比丘

已上廿四夜

隨喜功德品

若長 若幼 卷陌

22ウ宗親へソウハ シタシ タトシ 至第五十

其第五十 卵生 樓閣

皺 所得功德 不如是 第五十人

如是第五十 於会中聞

天宮 人言 有經名

間聞 共生 万世

23才不黄 不差 縮

」

脰キム 悪 脇睨

狭長 高直 円満

我今応当教 咸应当

舌不乾 須臾聞歡喜

勸人

23 ウ法師功德品

皆令清淨 所畏心

余山 愁嘆 言之

琴瑟箏篳篥 之音声

嶮谷 其音声 相呼

諸音声 多伽羅 丸

24 才如是等天香和合所出之香

諸天身香 勝殿 若香

及知 諸宮人 宝女

嚴身 香氣 野牛水牛

伏藏 花莊嚴 若經行

法^ッ生[○]鼻[○] 若^ッ好[○] 方[○]面

24ウ死時[○] 諸[○]群[○] 俗^ッ間[○]

語[○]言[○]

25才

第七 不^(マ)經^(マ) 品

威音王[○]仏[○]寿[○]四十[○] 名[○]常[○]不[○]輕[○]

深[○]敬[○] 多[○]年[○] 猶[○]高[○]声[○]唱[○]言[○]

五百比丘[○]思[○]仏[○]へ未[○]定[○]然[○]而[○]可[○]如[○]此[○]歟[○]

及^ッ見[○] 当[○]深[○]心[○] 隨[○]喜[○]

25ウ神力品

虛[○]空[○]中[○]声[○]已[○] 南^ナ無[○] 南^ナ無[○]

衣[○]舍[○] 山^ッ谷[○]曠[○]野[○]

屬[○]累[○]品

難^ト得^ッ 有[○]慮[○] 諸[○]分[○]身[○]

藥[○]王[○]品

26才宿[○]王[○] 及^ッ此[○] 海[○]此[○]岸[○]

畢力迦^{ヒリカウカ}〈梵語也〉 沈水膠香^{ケイ}〈物名也〉

灌諸香^フ 及海此岸^フ 甄迦羅^カ

我今当還供養此仏白已

上昇^ウ 容^{ケン}顏^{カン} 二讀供不苦云々

及給侍^ッ 若干千塔^フ 発阿^タ

26ウ 兩臂^ウ 還復^ウ 土山黒山^ウ

川流^ウ 如清涼^ウ 如商人^ウ

客^{カク} 炬^ウ 怨敵^{チャク}

妙音品

我当往^ウ 及見^ッ 莫輕^{マク}

我今詣^ウ 亦欲^ッ 照曜^ウ

27才而來詣^ウ 其三昧名現^ウ

第八 普門品第廿五^ウ

觀其^ウ 大水^ウ 漂随羅刹^ウ

国土満中^ウ 着上着下^ウ 兩義^ウ 勿得恐怖^ウ

衆商人^ウ 俱發声言^{ホツ}

即解頸衆宝珠璎珞

27ウ観音行 善心 千億

及見身 觀音力 爪

降雹 真觀清淨觀

智惠觀 悲觀及慈觀

須常念 普門品時〈品字着上着下両義〉

陀羅尼品

28才咩〈羊鳴〉〈非及ニハ鳴ノ音ナリ。メイト讀付タリ〉

短 便 黑齒

勒伽 如殺 厭油

消衆

嚴王品

長莊嚴 指爪掌

28ウ是誰誰之 亦欲

空中下 甚難值 復難是

脱諸難亦難 值浮木

歡悦 殊特 付第

法花説誦相承 梶井流

慈覺大師 承雲和尚

尊意贈僧正 安愿内供

尋叡内供 明快大僧正

良眞大僧正 最雲法親王

31才 仁豪僧正 明雲大僧正

〔顯眞權僧正 仁全法印〕

承弁法眼 源全法印

義源

惠心流相伝

惠心 覺超

31ウ 勝範

蓮葉功

中島院王 長豪

忠尋

桂林坊僧都 寛勝

仁眞

功德院法橋

安樂谷 行忍上人

阿観上人

安樂谷

〔妙観上人 靈山院〕

義源

〔義源〕

32才 〔右両流〕同但口決更問〕

┌

┌

┌

付記
本稿は、平成十五年度科学研究費補助金（若手研究(B)）による研究成果の一部である。